なぜ，社会科でパフォーマンス評価なのか？

（問題の所在）

○　社会科の究極目標「社会の形成者としての市民的資質」の育成
　･･･評価手続きにおいて未だ要領を得ない「**はだかの王様**」状態

○　社会科の現場は「**用語の暗記**」に堕してしまい
　･･･正鵠を射ることを断念

○　殊に中等社会科での「用語の暗記」側に大きく的を外した授業実践の常態化･･･我が国の中学生の**市民的資質育成が著しく疎外**

○　状況を打開する一手立て･･･「**他者との関係構築的な認識形成**」を目指す**社会科固有のパフォーマンス評価**は喫緊の課題

目　的

本研究は，社会科の究極目標である「社会の形成者としての市民的資質」の育成に照射し，PISA 型読解力やキー・コンピテンシー（OECD）でも指摘される「他者との関係構築的な認識形成」（いわゆる「アーギュメンテーション」：理由付けの主張／それら主張のやりとり）について，社会科固有の枠組をもとにペーパーテスト開発として，その評価方途を明らかにすることを目的とする。

〈具体目標〉

１．学問的な認識論や社会構築論等をもとに社会科評価の観点や規準等を析出する。

２．中学校社会科において，議論や交渉など他者との対話的な相互作用を前提とする社会のわかり（「かかわりの知」）を測定する評価問題としてペーパーテスト事例に具体化，類型化して開発する。

３．それらについて有効性の検証を通して提案する。

方　法

１．中学校社会科の各種学力調査，入学試験，定期考査等，ペーパーテスト事例を収集する。

２．特に「社会科の方法原理（依拠する認識論や社会構築論等）」及び「他者との関係構築的な認識形成（の有無）」の観点から，市民的資質の指導と評価の実態を分析し，具体的な課題を明確化する。

３．これらをもとに，「社会の形成者としての市民的資質」を評価するペーパーテスト作成の基盤となる，社会科固有の評価枠組みを明らかにする。

４．析出された社会科固有の評価枠組みをもとに，定期考査，入学試験，学力調査等での実用を想定して，具体化された問題事例を開発する。

５．これらを，実施して得られたデータをもとに，通過率，正答・誤答例等の分析から，開発した問題事例の妥当性及び信頼性を検証して広く提案する。

かかわりの知

表１．「かかわりの知」による関係構築的評価枠組

社会事象間の関係（係わり）･･･関連性

〇社会認識内容としての関係　･･･事実／価値

・関係構築の要素（いわゆる個別的知識）としての事実認識

・個別的**関係認識**

・概念的**関係認識**

・価値**関係認識**

認識主体間の関係（関わり）･･･他者性

〇社会認識方法における**他者性**（相互作用）としての関係　･･･**アーギュメンテーション**

・他者への自己認識の説明

・他者認識の活用（引用・援用・批判・妥協・調整など）

・討論など他者との直接的な対話的交渉

社会事象と認識主体の関係（拘わり）･･･状況性

〇参加を促す状況（課題に向かう目的）提示としての関係　･･･**パフォーマンス課題**

・社会論争問題としてのパフォーマンス課題･･･現実社会への参加要請

・学習活動遂行としてのパフォーマンス課題･･･共に学ぶ社会への参加要請

表 2．社会科市民的資質とパフォーマンス評価

		パフォーマンス評価の枠組み		
		原理と一般化	本質的な問い	永続的理解
社会科の枠組み	関連性：係わり	具体的事象間に働く因果律の説明（個別的関係認識）を統合し，一般則への概念化として昇華された説明（概念的関係認識）。	現実の社会的文脈に位置付いて，原理や概念の具体的事象への適応・解釈及びそれらを用いた個別的･概念的関係認識をもとに，個の社会への位置付けや社会の在り方についての規範的な問い（価値関係認識）。	現実の社会的文脈に位置付いて，原理や概念の具体的事象への適応･解釈及びそれらを用いた個別的･概念的関係認識としての説明。
	他者性：関わり	事実関係認識の把握について，原理・一般則や概念を用いた，他者への説得的説明（事実関係認識の共有）。	事実関係認識又は価値関係的判断の選択にかかわって，原理・一般則や概念を用いて意思決定すべき，個の社会への位置付けや社会の在り方についての規範的な問い（対立／合意）。	事実関係認識又は価値関係的判断の意思決定にかかわって，異なる認識や判断を持つ他者への説得的説明による認識共有できた理解又は議論を経た対立的理解。
	状況性：拘わり	課題に向かう目的を明確に持ち，社会実践，学習タスクなど，現実の社会的文脈に位置付いて，知識・概念など知的道具の演繹的または帰納的な活用。	課題に向かう目的を明確に持ち，社会実践，学習タスクなど，現実の社会的文脈に位置付いて，社会の在り方についての意味，意義やそれを成り立たせる方法を問うための問い。	課題に向かう目的を明確に持ち，社会実践，学習タスクなど，現実の社会的文脈に位置付いて，知識・概念など知的道具の活用を通じ課題解決することによる，それら知的道具の我有化。

社会科パフォーマンス評価の性格

① **直接内容準拠**評価

まず，社会科における特定の単元内容の範囲で学習成果を直接に評価する性格のパフォーマンス評価である。単元や時間の範囲での比較的小さな学力としての原理や概念の応用についての評価である。主として，習得した原理や概念の応用としての「手続き的知識[i]」の評価を目指す。単元末テストや定期考査などの用途を想定したパフォーマンス評価である。

② **再構成探求**評価

もう一つは，社会科における複数の単元の学習内容を関連・統合し自ら再構成して探求する学習成果を評価する性格のパフォーマンス評価である。1つの単元に収まらない範囲の比較的大きな学力としての原理や概念の選択・統合的な応用についての評価である。主として，習得した原理や概念をもとに新たに探求を深め自ら再構成した「宣言的知識[ii]」の評価を目指す。学期のスパンを超えた実力考査や入学試験などを想定したパフォーマンス評価である。

表３．社会科パフォーマンス評価の性格

	直接内容準拠評価	**再構成探求**評価
カリキュラム上の**評価様態**	単元内／時間内	単元間／単元統合
学力の**評価範囲**	（比較的）小さな学力	（比較的）大きな学力
核となる**評価要素**	原理・概念の応用	原理・概念の選択・統合
基本的な**評価特性**	主）手続き的知識 副）宣言的知識	副）手続き的知識 主）宣言的知識
実践に向けての**評価用途**	単元末テスト／ 定期考査 など	学期超の実力考査／ 入学試験 など

（豊嶌ら作成）

[i] Winograd, T. *1975 Frame Representation and Declarative-Procedural Controversy.* In D .G.Bobrow. 淵一博(監訳)1978『人工知能の基礎−知識の表現と理解』近代科学社 pp.171-194。

知識の表象形式について，ウィノグラードは条件と行為の連鎖の集まりで表現される「手続的知識(procedural knowledge)」と，意味のネットワークとして表現しやすい知識を「宣言的知識(declarative knowledge)」と名づけ区別している。

[ii] 前掲書。